

日米の生活比較

泉 敬子

The Comparison between Japanese and American Life

Keiko Izumi

アメリカの歴史は植民地時代に始まり、約170年間を経て1776年独立したことは周知の通りである。

アメリカはWASPという言葉で代表されるように白人(White)、アングロサクソン(Angro Saxon)、新教徒(Protestant)がアメリカ社会の支配的な階層である。アメリカはもともとイギリス本島から移住して来たProtestantによって作られた国であり、彼らはプロテスタントの思想と自営農民制度と英語をアメリカ大陸に持って来たと言われる。アメリカの歴史よりみて多民族国家であり、殊に第二次世界大戦後は更に多様な人種と民族が入って来た。即ち、戦前から亡命して来ているユダヤ人のほか、アフリカから奴隷として移民させられて来た人々の子孫である黒人、ラテンアメリカ系(キューバ、プエルトリコ、メキシコ)アジア系(ベトナム、フィリピン、韓国など)の人々などがアングロサクソン系の白人によるアメリカ社会に流入して非常に多様性の高い一つの社会をつくっているのが実態である。このような社会を統一して行くために、アメリカは大きな社会的エネルギーを使わなければならないのが現状である。これに対して日本は1億余の人口の殆どが単一人種、単一民族であり、従って考え方や行動なども画一的な面が多く、アメリカ

と対照的である。

各種の多様性を受け入れて来たアメリカと単一民族のわくの中で生活して来た日本社会とは当然ことなる事象が存在すると思われる。従って、それぞれの社会に住む人はどのような生活をしているのかを比較検討してみたいと考え、本資料の作成を行った。

本報告は1988年のホームステイ、1989年の2ヶ月余の滞在の経験と文献による調査をまとめたものである。

1 社会生活面

① 社会資本……図(1) (2) (3) 表1

日本は社会資本の蓄積という点ではアメリカに比べて極めておけている。

殊に都市公園、図書館、博物館、下水道普及率などに大きな差がある。

都市公園……アメリカで比較的公園に恵まれないニューヨークでも、セントラルパークは308ヘクタールあり、人口1人当たり19.2㎡である。日本では国営昭和公園が180ヘクタールで広いが、セントラルパークの60%位の広さである。もともと日本の国立公園制度はアメリカにならってつくられたもので、アメリカに約60年後れて制定されたものである。

図書館……人口10万人あたりの公共図書館数は日本が1.5館に対してアメリカは約4館

図1-(1) 都市公園

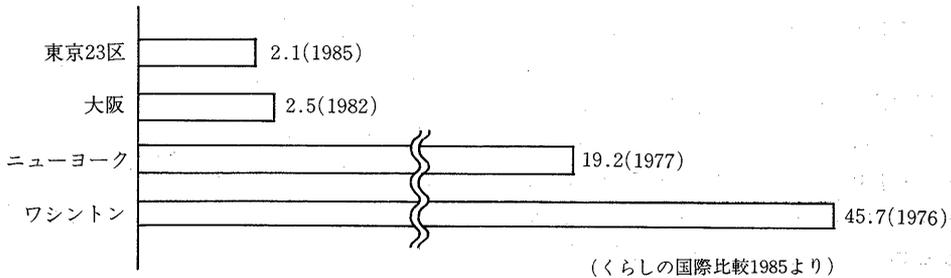


図1 生活関連社会資本

図1-(2) 図書館

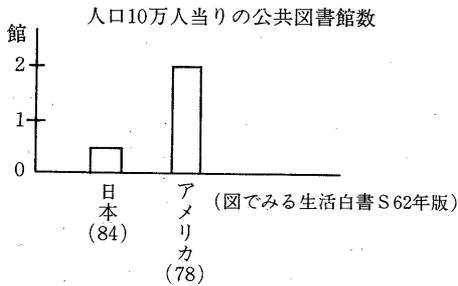


図1-(3) 博物館 (人口10万人当たり館数)

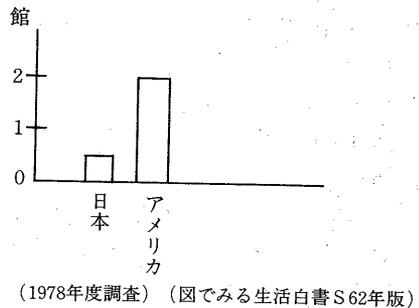


表1 図書館蔵書数

国立国会図書館	国立以外	アメリカ合衆国議会図書館	ニューヨーク公共図書館
本部 4288,742	133,290	20,000,000	12,000,000
支部 4645,132			

(日本の図書館1987より)

である。アメリカ最初の公立図書館は1854年ボストンに設立されたが、19世紀末から20世紀始めにかけてカーネギーの寄付により本格的に始まった。市民への貸し出しは無料が原則であり日本当初の有料というのは異なる。日本も1946年、アメリカ占領軍の勧告により無料化された。

博物館……人口10万人あたり、日本では0.5館、アメリカはその4倍の2館である。

博物館、美術館も原則として無料。志だけということであり、日曜日には多くの人々が出かけている。全米の博物館は4600を数え、中でも世界最大規模の博物館と美術館の集合体としてワシントンにスミソニアン・インスティテューションがある。¹⁾

② 医療

医師の数は人口1万人あたり日本は14人、アメリカは18人であり、看護婦は日本45人に

対してアメリカは66人である。アメリカでは医療費の高いことはよく知られているが1982年で日本はGNPの6.7%、アメリカは10.6%となっており、両国とも増加の傾向にある¹⁾。医療費の高い例として盲腸の手術をした場合7日間の入院でニューヨークでは6050ドル(1ドル150円として約90万円)、サンフランシスコでは4348ドル(約65万円)の費用がかかると云う²⁾。日本は医療保険制度に基づく医療制度であるのに対して、アメリカは自由診療が中心であるため、各州によってもかなり医療費はちがってくる。

アメリカの病院はメイヨークリニックを始め、ジョンホプキンス大学附属病院その他世界的に著名な病院が多く、高度の医療体制がしかれている。日本の医師もアメリカの病院で研究をしてくる者が年々多くなっている。

今回見学した病院では、入院室は日本のように個室が多く用意されているのではなく、大きなへやをカーテンで仕切って何人もの入院患者を収容している。ベッドはストレッチャー形式のものをつかいそのまま検査室に運んで行くことができるようになっている。

救急病院では入院患者を緊急度によりふりわけ、急を要する患者は即治療を開始するがそれ程一刻を争う必要のない患者に対してはベッドの上でかなりの時間待機させている。諸検査は徹底的に行われ、その結果は1~2時間のうちに分かるような仕組みになっており血液検査等に1週間位もかかるという日本の場合とは大きく異なっている。

外来の患者に対して徹底的に話を聞き、患者の気持ちを和らげて治療を行うやり方は、日本の病院で1~2時間待って医師との接触は3分間という実情に比べ、学ぶべきところが多いと考える。又、小児科医は子供に不安を与えないよう白衣を着用しない傾向にある。子供は安心して医者と会話を交わし、手術を必要とするような場合でも、不安を持たずに治療をうけるという。

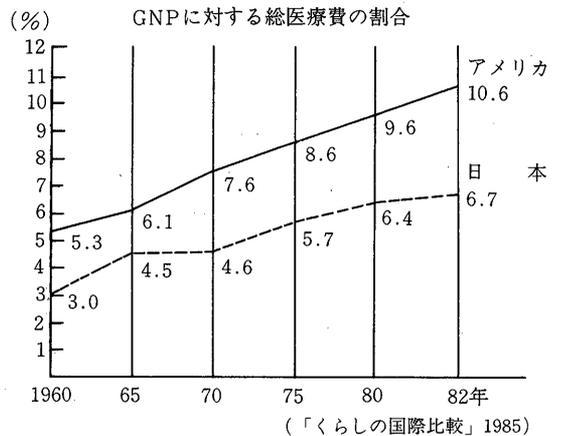


図2 GNPに対する総医療費の割合

表2 アメリカ貧困レベル以下の中民(1985)(単位%)

	全人種	白人	黒人	ヒスパニック
北東部	11.6	9.8	28.0	39.2
中東部	14.9	11.4	35.3	27.4
南部	16.0	11.9	32.7	27.7
西部	13.0	12.1	20.1	26.0
合計	14.0	11.4	31.3	29.0

「1988 アルマナック」

③ 貧困

アメリカは貧富の差が大きい国である。貧富は人種によって異なっている。

表2に見られるように貧困レベル以下(4人家族で年収1万2000ドル以下)の市民は白人11.4%、黒人31.3%、ヒスパニック29.0%という比率である¹⁾。

人種による就職の差別は現在においては以前にくらべたらだいぶ改善されていると考ええられるが、黒人やヒスパニックの中には中々職を得られない者もあり、為に貧困レベル以下のところにその割合が多くなっている。

日本は貧富の差が少ない国となっている。第二次世界大戦前までは貧富の差が大きく“赤貧洗うが如く”と表現されるような家庭が特に農村においてみられたが、現在ではそのようなことがなくなったことは幸せである。

表3 日本・アメリカ小売価格の比較

(東京=100)

項目	単位	東京 (円)	ニューヨーク	
			換算価格(円)	価格比
食パン	1 kg	371	293	79
牛肉	100 g	354	141	40
鶏卵	1 kg	254	180	71
キャベツ	1 kg	226	106	47
たまねぎ	1 kg	144	104	72
食用油	700 g	341	279	82
背広服(冬物)	1着	51,300	40,144	78
ワイシャツ(長袖)	1枚	3,865	3,590	93
スカート(冬物)	1枚	8,810	12,149	138
カラーテレビ	1台	125,600	62,615	50
ガソリン	1ℓ	125	38	30
理髪料	1回	2,755	1,816	66
パーマ代	1回	5,750	7,646	133
クリーニング代	1着	881	966	110

(東洋経済「統計月報」1988.9)

④ テレビ、ラジオ

1984年～1986年にかけて、人口1000人当たりのテレビの台数はアメリカ790台、日本563台(平均1家族1台)とその他の国に比し、両国とも普及率は高い。テレビ局もラジオ局も日本はNHK中心で民放は少ないがアメリカは民放が中心で内容も多彩である。テレビ局ではニュース番組のみを取扱っている局、映画のみを放送する局、音楽番組中心の局というように非常に多様性があり、全国的に同一に放映されるNHKのような番組を見ている日本の状況とはかなり趣きが異なっている。

⑤ 生活物価

日本、アメリカの小売価格を比較すると表4のようになる。東京を100としてニューヨークと比べた指数は牛肉40、キャベツ47、カラーテレビ50、ガソリン30というようになっており、如何に東京の物価が高いかが分る。スカート(冬物)、パーマ代、クリーニング代等はニューヨークの方がやや高くなっているが

総体的に日本は衣、食、住に関して暮らしにくいと考えられる。住生活は広大な土地をもつアメリカに比し、せまい土地の日本は地価が大変高く、従って家賃も高く、住宅への満足度は44%でアメリカの満足度71%に比し大きな差がみられる。更に美しい居住環境の中でくらすことへの満足度は日本では6.4%に過ぎず、アメリカの満足度39.3%に比べても居住環境の改善が望まれる。

II 家庭生活面

① 家計の消費動向

国民所得に占める家計消費の割合(家計消費比率)はアメリカは65%、日本は60%である。1985年の家計の消費構造を比較すると表6のようになる。エンゲル係数をみると日本は24.1%アメリカは15.8%で、前述の表3からも分るように日本の食料品の高いことは国民の生活に大きな影響を与えるので、食肉や農産物等の食料輸入の拡大を考える必要があるのではないかと考える。

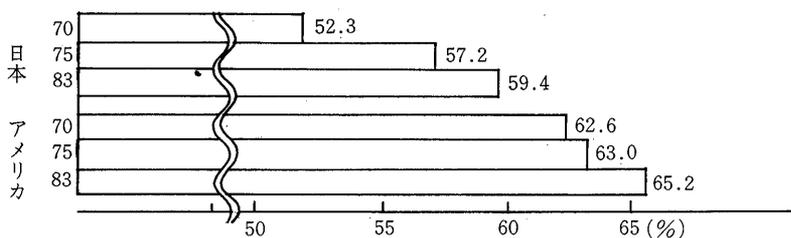


図3 家計消費比率 (「くらしの国際比較」1985)

	その他	教養娯楽	交通通信	医療保険	家具家庭器具	家賃・光熱費	被服	食料 (%)
日本	16.8	9.3	9.3	10.3	5.5	19.2	5.5	24.1
アメリカ	20.7	7.9	10.2	11.1	6.2	21.6	6.5	15.8

(「くらしの国際比較」1985)

図4 家計消費構造

表4 アメリカ並みの価格を仮定した場合

	わが国の家計消費支出額	アメリカとの比較		
		アメリカの費目別相対価格 (日本=100)	アメリカ並の価格を仮定した場合の支出額	アメリカ並の価格を仮定した場合の支出額の現実の支出額に対する割合
食料	74,369円	48	35,697円	72 (=207,868/ 289,489)
住居	13,748	77	10,586	
光熱・水道	17,125	51	8,734	
家事・家具用品	12,182	82	9,989	
被服・履物	20,176	84	16,948	
保健・医療	6,814	100	6,814	
交通・通信	27,950	91	25,435	
教養・娯楽	25,269	69	17,436	
教育	12,157	145	17,628	
その他の経費支出	79,699	74	58,601	
家計消費支出合計	289,489		207,868	

(経済企画庁編「21世紀への基本戦略」)

わが国の家計消費支出額をアメリカ並みの価格と仮定して考えると現在の約72%の消費支出となると云われる。

② 家計貯蓄率

アメリカは伝統的に家計の貯蓄率は低い。

これはアメリカの税制において借金の金利返済が課税対象から全額控除できることになっていた為といわれるが、一部税制改革を行った現在でも貯蓄率は下降して1985年調査では5%となっている。これに対し日本人は昔か

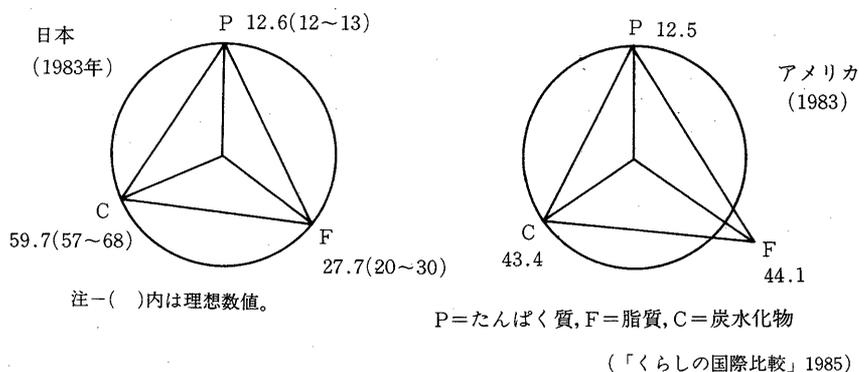


図5 たんぱく質・脂質・炭水化物の熱量比率(PFC比率)

ら貯蓄を好み、同年に17.3%となっている。アメリカは年金等社会保障制度の確立により特に貯蓄をしなくても将来に不安をもつ必要のない事も一因と考えられる。

③ 自家用保有台数

1000人当たりの乗用車の保有台数はアメリカの531.9台に比べ日本は208.6台となっているが、オートバイ・スクーターなど二輪車は生産、保有台数とも世界一となっている。

又、トラックやバスの保有率が高いのも日本の特徴である。日本は道幅がせまく、オートバイやスクーター等の普及率が高くなっており、又、交通事情の影響で夜間を通して24時間走っているトラックが多いのもうなづける。

アメリカでは1人1台自家用車を持っている家が多く、車を買えない人達がバスや電車を利用している状態であると見てもよい。

④ 食生活

たんぱく質、脂質、炭水化物の熱量比率を図5に示す。この比率は日本の場合、略々理想数値を示しているがアメリカの場合は、脂質が過剰で炭水化物が少ない。

しかし日本においても最近欧米に近い食事を摂るようになって来たので脂肪のとりすぎ

には十分留意しなければならない。

アメリカ人はコレステロールの過剰摂取や脂肪、糖分の過剰摂取による肥満に対して、極力食事に注意しており、一昔前よりはやや肥満の人が減少しているように思われる。

⑤ 家事に対する考え方

「結婚後は夫や子供など家庭を中心に考えて生活すべきである」と考える人が日本人71.3%、アメリカ人17.6%と大きなちがいがみられる。又、夫婦共働きの場合「家事分担は夫と妻が平等にすべきである」と考える人は日本人男子では23%女子では27%に対し、アメリカ人では男子73%、女子75%と日米に大きなちがいがみられる。日本では昔からの“家”制度の考え方が現代においても引き継がれて来ていると考えられる。

現代は既婚婦人の就業率¹⁾が50%を超えている時代でもあり、家族全体が分に応じて家事を分担する方向で考えて行くことが必要であろう。アメリカの家庭では共働きか否かに拘らず、夫がよく家事を分担している。食事のサービス(皿を運んだり、ワインの用意をしたり、肉を焼いたりなど)、掃除、庭の手入れ等々である。妻も決して手ぬきをしているのではなく、自分のなすべきことは実によく

表5 父親の評価

都内の中学に通う 2年生男子50名による 父親はどんな人か	都内のアメリカンスクールに通う 2年生男子50名による 父親はどんな人か
1 忙しい……………68.0%	1 立派な……………60.0%
2 信頼できる……………48.0	2 信頼できる……………60.0
3 たくましい……………48.0	3 忙しい……………58.0
4 頼りがいがある…36.0	4 偉大な……………56.0
5 男らしい……………32.0	5 たくましい……………38.0

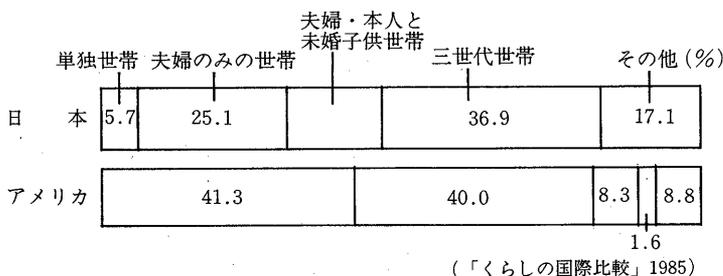


図6 日本・アメリカの家族構成

処理しており家庭生活全体が合理的でありゆとりをもっているように感じられる。

因みに女性の社会で働いている年齢を比較すると日本では25～35才までの間は結婚、出産のため専業主婦になるケースが多くみられ、40才を過ぎてから就労する人が多い傾向である。(パートが多い)これに対しアメリカでは結婚、出産によって専業主婦とはならず、仕事を継続しているケースが多い。保育所等が日本に比し完備されていることも一因であろう。そして45才以降は引退して地域活動やボランティアに従事する人が多いと聞いている。

⑥ 父親の存在

日本の父親は近年その権威が失われている傾向にある。唯、家族のために働くことを余儀なくされ、子供の目に映る父親像は“忙しい人”である。アメリカの父親は子供が職業をえらぶ時にも父親を信頼して、その影響を

うけており、父親は“立派な人”というように受けとめている。これは都内中学(男子)2年生及び都内のアメリカンスクールに通う男子2年生(アメリカ人)それぞれ50名宛にアンケート調査をしてもらった結果であり表5のようになっている。子供からの評価はアメリカの父親の方が日本の父親に比べて高い結果となっている。

⑦ 家族構成

アメリカの世帯形態は最近大きく変わって来ている。即ち独身世帯が増加し、夫婦中心の世帯が急減している。日本では現在単独世帯5.7%に対しアメリカは41.3%、三世帯同居は日本で36.9%、アメリカは1.6%で極めて少ない。

日本は昔からの家族制度にもとづく考え方が依然として根強いことを示しているが、一方日本においては高令者世帯が必要とするサ

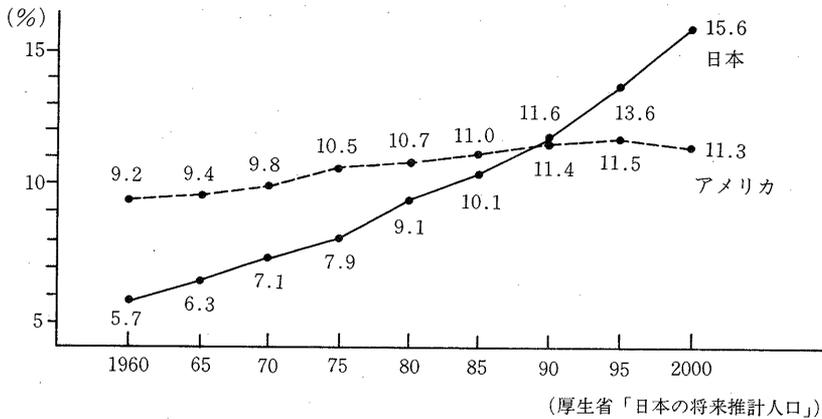


図7 65歳年令人口推移

一ビスを家庭外から受けることが困難であることも一因であろう。又、精神的自立の訓練が若い時から行われて居らず、年をとったら子供の世話になるという子供依存的な考え方を持つ人が未だに多いということも挙げられる。

⑧ 高齢化

日本は1970年度に既に高齢化国の一つとなったが1988年度には老年人口が11.2%となった。図7にみられるようにアメリカは徐々に高齢化が進んで来たのに対して日本は急速に高齢化が進んで来ている。

アメリカの社会は退職をしても老後の生活は保証されており、退職後は悠々自適の生活が送れるという状態にあり、まさに happy retirement である。

日本の場合は必ずしも退職後の生活は保証されておらず、ために老後も「収入を伴う仕事」を希望する者が多い。即ちアメリカ人がイメージする老後と日本人のそれとは大きく異なっている。

高齢化社会において心身共に健康な老人が生活を保証され安定した楽しい生活ができるようでありたいと希望するものである。

以上、日米の人々の生活を社会生活面及び家庭生活面について比較検討を行って来たが、更に文化的な面、政治経済の面等と考え合わせる時、アメリカに比し日本はまだまだ充実した社会生活を営んでいるとは考えられない。

アメリカと日本は上記のように異なった社会組織をもつ国であるが、現代においては共に世界に極めて大きい影響を与え得る力をもった国である。両国の間には貿易摩擦や農産物の自由化等の解決すべき問題があるが、両国は更に理解を深め、これらを解決して、世界の発展に寄与することを期待したい。

附記：文中のデータについては日米比較研究会のデータを引用させて頂いた。

参考文献

- 1) 日米比較研究会著：日本 VS アメリカ、PHP 研究会、1989
- 2) 遠山紘司：アメリカ生活事典、白馬出版、1989
- 3) 松岡陽子マックレイン：アメリカの常識・日本の常識、読売新聞社、1989
- 4) 鈴木健次：アメリカを読む、河合出版、1989
- 5) 佐藤和夫：アメリカの社会と大学、日本評論社、1989

- 6) 宮城正枝：出会いのアメリカ、花伝社、1989
- 7) 金坂健二：アメリカを撮る、朝日ソノラマ、1978
- 8) 小原信：新、アメリカ見聞録、PHP 研究所、1978
- 9) 鈴木文彦他：北米大陸に行く、日本放送出版協会、1962